

書 評

山田安彦 編著：

『方位と風土』

古今書院 1994年11月

A 5判 288ページ 5,665円

かつて名著『古代の方位信仰と地域計画』（1986年、古今書院）を著わし、異色ある所論を展開された山田氏が方位研究の第二弾として本書を世に問われた。今回は山田氏自身の執筆は序章と第1章のみと控え目にされ、他の諸章を12人の研究者の分担執筆に委ねている。先ず各章の題目と執筆者名を記す（副題は省略）。

- 序章 方位と地点と生活と（山田安彦）
- 第1章 方位と位置の倫理関係（山田安彦）
- 第2章 地図の定方位（定位）と方位記号（高橋正）
- 第3章 近世の地図にみる方位（川村博忠）
- 第4章 地籍図にみる方位（桑原公徳）
- 第5章 古墳と方位（白石太一郎）
- 第6章 条里地割の方位（戸祭由美夫）
- 第7章 近世城下町のプランと方位（小林健太郎）
- 第8章 山岳霊場における集落・行場の立地と方位（長野 覚）
- 第9章 農山村における生産基盤と方位観（大石堪山）
- 第10章 漁村における方位認識（斎藤 毅・古田悦造）
- 第11章 民家と方位（早瀬哲恒）
- 第12章 環境生態における方向性（立本英機）

2～4章で古地図、5～7章で歴史地理学上の諸問題、更に宗教・農山村・漁村・民家と内容はまことに多彩。執筆者はそれぞれの分野で定評のあるエキスパートだから安心して読むことができ、学び得たことが多かった。これ等執筆者の中には前から方位の問題に関心をもち研究してきた方もあるが、今までは方位については格別の関心があったわけではなく、本書に執筆参加することになって改めて方位の問題を考えてみたという方もあるようだ。本書編集という仕事を通じて山田氏の残された最大の功績は、多くの人に方位の問題に関心をもち研究しようとの機運を盛り上げられた事ではないだろうか。執筆者に続いてこれからは読者の中からこの方面の新

研究が続出することを期待したい。かくいう評者においても今まで方位について特に関心をもつことはなかったが、今まで手掛けてきたテーマにつき方位の視点を入れて見直してみたいと思っている。

各章の論旨を要約紹介することは省略させて頂き、気づいたことや感想の幾つかを述べることにする。

先ずは寺社の方位について。長野覚氏は英彦山における西方指向を重視し、その宗教的意義を詳述される（第8章）。また山田安彦氏は平泉中尊寺の金色堂が東面する事に注目される。山田氏は「仏教東漸の影響により東方が正方」と特定教理でなく一般論的に説明される（序章）。ところで英彦山も中尊寺も天台宗である。東京附近の主な天台宗寺院を見ると浅草寺・上野の寛永寺・日光の輪王寺は南面し、川越の喜多院は東面している。同じ天台教学にもとづきながら方位については区々の対応をしていることになる。西方浄土という事を一番重視するのは浄土系諸宗で、阿弥陀如来を東面して祀るのがその趣旨にかなって居り、京都の東西本願寺や芝の増上寺はそうになっているが全国的にみればどうなのだろうか。長野・山田両氏の所論を重要な問題提起と受けとめ、各宗寺院の方位を詳細に検討することが今後の課題であろう。

神社の方位も問題になる。注目されていないようだが、60年前に出た平井正武「神社の立地、方位論」（1938、地理学6-1）という先駆的論文もある。以前北向きの神社は大陸系の神との所説を読んだことがある。その時はなる程と思ったが、再検討の必要があるようだ。府中の大国魂神社は北面している。これは武蔵国の総社で大陸系の神ではない。

川村氏は現今の地図と違い、上が北とは限らない。各地で色々な方位が採用されていると説く。ほとんどの江戸図が西を上にする理由として「東の海側を手前にすえて西方の富士山を上を仰ぐのが描きやすく、江戸城を前面にすえれば図柄が一番安定する」とされている。江戸城については同感だが他は賛成でき兼ねる。海は江戸の東ではなく東南、北を上にするれば右下、西を上にするれば左下になって図柄の安定という点では同等である。また多くの江戸図に富士山は描かれていないからである。

6章では正方位条里・非正方位条里が論ぜられる。

正方位条里地割が卓越するのは幾内とその近接地がほとんどあるが、武蔵に居住するせいか幾内に遠い地の正方位条里が気にかかる。武蔵だけでなく関東には正方位の場合が多い（大規模ではないにせよ）。それも地形・水系に合わないのを無理に正方位にしたと思えるのが目につく。その理由について素人なりの意見を述べさせて頂くので戸祭氏はじめ専門家の方々の御教示を頂ければ幸である。

条里施行についての中央からの指示には正方位の図が附されていたと思う。これを受けた地方の側ではその通り施行せねばならぬのか、単なるモデルで現地の状況に応じ適宜の処置をとってよいのか迷ったのではなかろうか、近江のような都に近い所では聞き返すことも容易だが遠い所ではそれもままならぬ。後で叱られるよりはと無理にも正方位で実施したと解してはいかがであらうか。

7章では100ヶ所の城下町につき城下町と町割の方位が正方位か否かの検証がなされて興味深い。この中に「近世城下町の」と銘打たれていながら戦国期の城下町で近世に継続利用されなかった事例（例：箕輪）が含まれているのはいかがなものだろうか。川越の場合、大手門より西に向う高沢町、それと直交する喜多町・南町を江戸町より優位と見て私は正方位の城下町と解している。

9章（大石堪山氏）と11章（早瀬哲恒氏）がともに内田寛一氏が家相を地理学的に扱った研究を取り上げられている。恩師の60余年前の研究が紹介再評価されたことになつかしさと感謝の気持ちがこみ上げてくる。大学入学後間もない頃の講義でこの問題が取り上げられ、「土地の状況を考えずにある方位を吉だ凶だというのは迷信、地形等の条件を考えて吉凶の判断をするのは科学」と言われたのを今もよく記憶している。

9章では「日向」「日陰」の土地利用が詳論される。「日向」「日陰」が問題になるのは農業的土地利用だけではない。古書・仏具等日射を嫌う商品を扱う店の多くは南向きをさけて立地する。神保町の書店街等はそうになっている。そういえば本書には都市の章がない。

11章の早瀬氏には今回はページ数の制約によるのだろうが別の機会に農家以外の民家（商家・漁家等）についても論じて頂きたいと思う。

12章では方位についてほとんど述べられていない。重要な課題ではあっても本書の1章としては違和感を覚える。

なくもがなの感想を述べたが本書が名著なことを再記し、多くの方々の精読を願ってペンを置く。

（中島義一）